



大岡昇平全集

第三卷

大岡昇平全集 第三卷

定価 三五〇〇円

昭和四十九年一月十日 初版
昭和五十一年四月五日 再版

著 者 大岡昇平

発行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

発行者 中央公論社

東京都中央区京橋二一一
電話(五六二)五九二一
〒104 振替東京二一三四

検印廃止
©一九七四

大岡昇平全集 第三卷 目次

小說
三

酸
素

化
粧

姉

家

女
相
統
人

母

父

解
題

池
田
純
溢

409 395 379 366 356 339 140 3

小說
三

酸 素

第一章

一人の小男が舷側にもたれ、陸を眺めていた。海はまだ暗かった。波を消された港の水が拡がっていた。ドック、突堤、倉庫、起重機、煙突など、港の水際を形づくる設備が、さまざまな光度の燈火を、飾花のようにつけたまま、次第に輪郭を現わそうとしていた。遠く背景の六甲の山は、茜色にあけかける四月の空に影絵を描き、その襷の文様を明らかにするつもりらしかった。

小男の妻と子はこの陸のどこかで、多分眠っているはずであった。三年会っていなかった。妻は彼が帰れない理由を知っているが、子供は理解しないであろう。彼等は不幸であろう。しかし天皇の名の下に、戦争に駆り立てられている、この陸の住人の大多数に比べて、別に不幸ということは出来な

いと小男は考えていた。そして今彼がその陸の沖まで来たのも、家へ帰るためではなかった。

赤い標識燈をつけた水上署のランチが、夜通し浮標に繋がれたこの外国船の周囲に動き廻っていた。

橋側から一つの高い人影が、マドロス風に肩をゆすって近寄って来た。

「ヘーイ、洪、何してるんだ」

その訛の強い英語の中に挿まれた「洪」という音に、小男はすぐ振り向き、

「何もしてないさ」

と返事することが出来た。それが二年以来この日本人の姓であった。少なくともチャイナ・タウンの薄暗い四階で贗造された身分証明書にはそう書いてあった。

「ブルルー、やにウォター・ポリスが走ってやがんな。どこへ行ってもポリスばかりだ」

「戦争だからね。奴等は神経質になつてゐる」

「奴等の戦争の道具を運んでやつてゐる俺達でもか。ヒットラーのきんたまを抜くのを後廻しにして、こんどもしこたま持つて来てやつたのに」

甲板は近づく荷役に備えて、ロープも甲板覆いも、取りかたづけてあつた。

「一時間もすりゃ忙しくなる」と小男は呟いた。

「センコウ・エキスプレスの連中は仕事がうまい」と相手は答えた。

一時間たつて、エキスプレスのボートが、沖仲仕を満載した舳を何隻も曳いて、静かな水面を渡つて来るさまを、小男は思い浮べた。

陽気な仲仕達はやがて艀口を開け、ヨーロッパへ廻せば「ヒットラーのきんたまを抜く」のに十分なはずの積荷を取り出すであらう。それがいつかは抗日統一戦線の兵士の上に、弾丸となつて降りかかると想像する苦痛に、小男はもう馴れていた。とにかく彼はそれを運ぶ貨物船の水夫であつた。

彼はこの国に陸揚げしなければならぬものを別に持つてゐる。曳ボートに乗つて来る制服制帽のエキスプレスの貨物係であれ、或いは仲仕達の一人であれ、「岡部」と名乗る日本人に渡すものがあつた。

その人はこの船の船員にいうであらう。

「お尋ねしますが、この船に陳という中国人の水夫はいないでしょうか」

「陳は大勢いますが、陳なんていうんですか」

「陳信夷」

「いや、いませんね」

その人は小男が会話者の声が届く範囲にいて、例えば次のようにいいながら、歩み寄るまで、同じ質問を繰り返すはずである。

「ああ、陳信夷ですか。知つてます。サンフランシスコで会いましたが、この船に乗れないのを、残念がっていました。どなたですか」

そしてもしその時相手が宿命的な「岡部」という名を発音することが出来たら、

「ああ、岡部さんですか。そんなら、陳君から頼まれて来たものがあるんです」

続いて「こつちへいらっしゃい」とその時は空虚なはずの船室へ誘うか、或いは「ちょっと待つて下さい。すぐ取つて来ますから」と待たせるかは、その場の情況、つまりこの見せかけの偶然が、同席者に与えた反応の程度による。

彼は無論岡部に沢山話することがあつたが、会話は消え去る。岡部以外の陸の人達に信じさすに足る何事もない。

下の船室にしているあの厚さ二寸ばかりの箱を渡さねば

ならなかった。それは美しい菓子箱の包装と商標を持ち、岡部が上衣の裏に忍ばせて税関を脱れることを、船員も「エキスプレス」の役員も見逃す仕来りの品物である。事実箱の上部には色とりどりのキャンデーが並べてあるが、底三分の一はソヴィエトの対芬政策の「正当さ」を、無智な日本の「同志」に呑み込ませるのに必要な、情報とテーゼによって占められている。

小男はその印刷物がこの船の運ぶ数千噸の鉄屑が、中国の「同志」に与える損失を蔽うに十分だと、思わねばならぬ。

水が明るくなると共に、水上署のランチは陸の方へ去り、あたりにしばらく動くものはなかった。

「まだ間がありそうだ。下で一杯やって来るか」と小男は丈の高い同僚を誘った。

「まったくお前は好きだな。荷役が済めば上陸して、元町でしたたか飲めるじゃねえか」

「俺はあがらない」

「どうして？ もとみたいに面白いこともなくなったが、日本の女の子はもてなしがいいぜ」

「俺はいやだ。彼女達が俺達中国人にそんなにもてなしがいいとは思わない」

小男は元町裏の水夫相手の酒場に行くことは出来ない。よく訓練されたこの国の特別高等警察の一人が、そこにもまぎ

れ込んでいて、彼の中国名前と中国語と、海光に焼けた皮膚にも拘らず、三年前の大阪本部事件の検挙に洩れた立花弘を認めたら、面倒である。だから彼はこの港の沖で「岡部」が来るのを待っていないからではないのである。

別の小男が「扇港エキスプレス」の赤煉瓦の建物に凭れていた。突堤はそこから長く港の中に延び、隣りの突堤との間に凹形に区切られた水が、夥しいランチや艇や団平船によって埋められていた。音が沖から次第に目覚めつつあったが、それら小船も、岸壁に停ったトラックもまだ眠っていた。

小男のソフトのリボンは汗で汚点になり、糸がほぐれていた。黒のサージの背広服の襟、肩、肘、脇、膝が光り、彼の現在の静止的姿勢に拘らず、これがなかなか活動的人物であることを語っていた。折返しのないズボンの裾から、木綿の靴下が歪んだ短靴の上にたるんでいた。

汚れた顔に眼は光り、頬骨はとがっていたが、権力に与して働く者特有の、どこかのつべりした感じがあった。

同じようなサージの背広を着た人物がもう二人岸壁にいた。一人は岸壁の繋留桟に片足をかけて海を眺め、一人は遠く突堤の先の物売り小屋の前に腰を下して、煙草を吸っていた。

ちえっ、仕様がねえ奴だ、と小男は考えた。人待ち顔に煙草なんか吸いやがって。目立つじゃねえか。テストにゃいい成績だったそうだが、新米はやっぱり駄目だ。あとで油を搾

ってやろう。

小男は待っていた。今朝この岸壁から沖の外国船へ行くはずの二人の人間が、たしかに舁に乗るかどうかを確かめねばならぬ。それがすんだら夕方までは暇だ。署へ帰って将棋を指そうと、煙草を吸おうと勝手だ。荷役を終った仲仕達と一緒に、大事なものを持って帰って来た時、二人にまた用事がある。

草履を穿いた仲仕の小頭が、欠伸をしながら溜りの硝子戸から出て来るのを合図に、岸壁は急に賑かになった。曲芸師の穿くようなパッチに、大きく紋を染め抜いた半纏を羽織り、肩当てと弁当箱と鉤を腰につけた仲仕達が、足速に四方から集って来た。纏った舁も身動きし始めた。目的不明の和船が一舟のろのろと、遠い造船所の船台目指して漕いで行った。遠く霞んで点滅していた港口の燈台の光が消えた。沖の船のどれかが鳴らした汽笛の音が水面を渡り、長い倉庫の壁に反響して、唸りを長く水の上の空に残した。

二階建の「扇港エキスプレス」の事務所は、中央部だけ三階になっている。「展望台」と呼ばれているその室は、四方に窓が明き、殊に港に向いた側は、天井から床まで透硝子が張ってあって、港の全景が見渡せる。一基の棒状の望遠鏡が窓に密着して据えつけられ、顧客の船が入港してからは、泊り込みの事務員が交替で見張っている。

第三の小男がその望遠鏡に取りついて、外国の貨物船を眺めていた。甲板には人が多くなっていた。褐色の胸毛を現わした西欧の水夫、丈の低い中国の水夫の間を、原色のタパンを巻いた少女が何か叫びながら縫って行く、その口の形まで、声は聞えぬながら、見分けられた。

サーヴィスの娘だな、これからあの船へ行けば、うまい紅茶が振舞って貰える、と小男は考え、微笑んだ。

彼はこうして望遠鏡で港を見るのが好きであった。彼はその職場「扇港エキスプレス」を愛しているように、曲った陸の線と三つの防波堤によって扇形に限られているところから、「扇港」と綽名されている神戸港を愛していた。

出入する各国の船舶のさまざまな設計、船楼と構成物、乱立するデリック、港に臨んだ船台から放たれる新造船の赤と黄、霞む起重機を愛していた。

戸田信雄は詩人であった。自分の労働——と彼はその貨物係の職を考えていた——から生れた感情を、自由な詩形に吐露し、それを夜西宮の小さな家で、幼い妻に読んで聞かせるのに楽しみを見出していた。

朝、港のあらゆる色彩は目覚め、

紺碧の空の下、

高らかにガントリー・クレーンは歌い、

水に飛ぶ海鳥の声と競う。

戸田は最近この「ガントリー・クレーン」と題する詩が、少なくとも五百人の人の眼に触れるという、限りない喜びを持ったところであった。「リベット」というその同人雑誌が、紫のインクも鮮やかならざる謄写版刷にすぎなかったのが、唯一の遺憾であった。

二カ月ばかり前勤めの帰りに、彼はその雑誌を元町の横町の本屋で初めて見た。三十頁ばかりの薄い紙面を埋めた作品は、神戸在住の文芸愛好家、特に労働者によって書かれたと編輯後記にあった。

宮本という編輯兼発行人の署名を持った石川啄木論を巻頭に、葦合の製鉄所の職工が書いたユーモラスな職場風景、南支戦線の兵士の妻の手記に、新開地の喫茶店の女給と川崎造船所の事務員のはかない情話が点綴されていた。「神戸の労働者諸兄弟の加入を望む。同人費五円」とあるのに誘われて——前述のように戸田は自分が「労働者」だと思っていた——一週間躊躇した後、奥付に誌された編輯所を訪ねて行った。

それは山手の、片側が石崖になった狭い路次の奥の、二階屋であった。下は船員の留守居の家族が住んでいるらしく、玄関に石版刷の帆前船の画がかかり、茶の間で子供の泣く声

がした。階段の下から内儀が呼ぶと、二階の話声が止んだ。

三十四五の男が降りて来て、「宮本です」といった。要件を聞くと一つ吐息して、「お上んなさい」といった。二階の六畳の間にあるのは、小さな机と本箱だけであった。くたびれた背広や緋の銘仙の三人の先客は、みな同人というものであった。自己紹介を終り、おずおず原稿に五円札を添えて出すと、戸田はあっさり加入を許された。

編輯長の宮本は附近の授産所に書記として勤める傍ら、好きで文学をやっているのだという。恐ろしいほど痩せて、こめかみの皮膚が、骨に張りついたようであった。猫背の姿勢は話の合間に、机上の謄写用の鉄筆板に向う時、一番しっくりして見えた。その日戸田は啄木の未発表原稿について新知識を得て帰った。

ひと月経つと、戸田の詩が載った雑誌を持って、宮本が社へ訪ねて来た。改めて「ガントリー・クレーン」の労働者的感覚を賞めた後、宮本は展望台から港の景色が見たいといった。しかしこれは外来客を入れるのを禁じられている室であった。宮本はそれでは一度曳ボートへ乗せてくれないか、といった。

「外国の貨物船でも、一度見せてくれませんか」

これは出来ないことではなかった。沖仲仕の小頭に少しつかまれば、舳へ乗せてくれないこともなかった。つかませ

る金額をいうと、宮本はあっさり承知して、次の機会に頼む
といて帰って行った。

外国船が検疫のため港外に碇泊し、事務所へ泊りとぎま
た夜、戸田は事務所を抜け出して、「リベット」の編輯所ま
で知らせに行った。一人の若い客がいた。林という名で紹介
されたその新しい同人は、最近東京の大学を出て、阪急の神
戸事務所に就職したばかりだという話である。血色のいい頬
と高い丈が、「リベット」の同人に似つかわしくなかった。

「どや、君も一緒に行ってみんか」と宮本が誘った。

「そう大勢では」と戸田が抗議する暇もなく、

「結構ですね。構いませんか」

と林という青年に、人なづっこく笑いかけられると、もとも
と抗議は別に根拠のあるものではなかったで、戸田はつい、
「ええ、一人でも二人でも一緒ですわ」と答えてしまった。
「では、よろしく願います」

と林は懷中から紙入れを出し、小頭に渡す金を出した。少し
余分であった。戸田がそれをいうと、

「いいですよ。いいですよ。ああいう連中には少し多い目に
やっとく方が、いいんじゃないですか」

と青年は笑いながらいった。その鷹揚な態度と東京弁が、戸
田の神経にさわった。

林は文学の話はしなかった。「リベット」という題名は、

いかにも神戸で出る雑誌に似つかわしい、貿易港であると同
時に重工業都市でもあるこの市を象徴している、と戸田がい
うと、林は笑って、

「リベットなんて近頃の造船じゃ使わないんじゃないですか。
大抵は熔接でしょう」といった。

戸田は二人に翌朝五時きっかりに「錨港エクスプレス」の
前へ来るようにいって帰って来た。

その五時に間近かった。港はもう完全に明け放たれ、右の
方兵庫の運河の入口には、鵜が群れていた。浮遊する港の残
滓を覘うらしく、一羽が突然羽を収め、身体を円めて、弾丸
のように水面まで落ち、忙しく水面を羽搏いてから、ゆっく
り岸壁の方を迂迴して、中空へ上って行った。

曳ポートの運転手がモーターを始動する音を聞いて、戸田
は展望台を下りた。金ボタンのダブルの制服を引っ掛け、正
面に Senko Express と金糸を縫取った庖丁き帽をかぶると、
係長に「行って来ます」と挨拶して、ゆっくり階段を下りて
行った。

事務所の前に、まだ宮本は来ていなかった。戸田は建物に
凭れている小男に気がついたが、そのずり落ちた靴下は、た
だ「変な奴」というほかは、詩人には何も語らなかつた。彼
は草履を穿いた小頭に、昨夜頼んどいた二人の見物客のこと
を、念を押しに行った。

「戸田はん、ほんまにこんどだけでっせ。このごろ大分うるさいよってな」

と色黒の肥った親分は横を向いていった。

そうだ、まったくこんどだけにして貰おう、どうもあの「リベット」の連中のやり方には、押しつけがましいところがあつて気に入らない、と戸田は考えた。

その時彼は肱に触る手を感じた。振り向くと宮本の痩せた顔が、歯を出して笑っていた。仲仕の中に混つても目立たないように、カーキ色のズボンに、工場の守衛のような詰襟を着ていた。

「お早う。遅くなりました」

宮本は手に「リベット」を二冊持っていた。

「ああ、宮本さん、来てはったんですか。まだちょっと間がありますわ。林さんは？」

「もうぼつぼつ来る頃やけど」

宮本は眉をひそめ、海岸通りの街路に遠く眼を放った。腕時計は五時五分前を指していた。

「早目に来いいうたんやけどな」

戸田はとにかく宮本を親分に紹介した。親分はじろつと宮本を見て、黙っていた。

「こんどだけや、いうんですわ。歐洲戦争からこっち一段と煩うなったんやそうでっせ」と戸田がそばから説明した。

「すみません。もう頼みません」

「あそこに変な奴が来てるし」

戸田は宮本の顔が歪んだのに驚いた。宮本は彼が顎でしゃくって見せた方に、顔も向けなかった。

戸田が振り返ると、靴下のずり落ちた小男の姿はそこになかった。

「おや、いない」

「やめや」

と不意に宮本が叫んだ。手の中で「リベット」をくるくる巻くと、頭の上で振った。そしてぱつと戸田の傍を離れた。

「どないやね、一体。これ、宮本さん」

後姿はどんな遠ざかりつつあった。戸田が追っかけるために、一歩踏み出そうとした時、例の小男が、建物の蔭から出て、宮本の肱を持つのを見た。

遠くて声は聞えなかったが、

「おい」

といったらしかった。宮本は抵抗しなかった。二人は散歩者のように並んで、進路を続けて行った。

あの卒業生がスバイだったんだらうか、と「岡部」こと宮本は、小男に肱を取られて、機械的に足を運びながら考えた。血色のいい若造を信用しなきゃいけなかったのだらうか。奴等は此頃やつと拷問に強くなったという話だった。古い連中が

みんな持つて行かれた今、奴等も使えないとすると、誰を使つたらいいんだ。しかし今日のことを知ってるのは、詩人と彼奴と三人きりだった。そして来なかったのは彼奴だけだ。

「あの船へ何しに行くつもりだったか、いうんだろうな」

と小男は地面に眼を落したままいった。いつの間にか、宮本に寄り添った人間が、もう一人殖えていた。

「ええ、いいますとも。うちを探してくれば、横文字の雑誌があります」

「それからもう一人来るって奴のことだ」

知らないのかな、宮本は思った。ほんとに知らないのなら、彼奴じゃないのだが——とぼけてやがるのかも知れない。まあ暫く此奴等の出方をみてみよう。スパイじゃなかったら、あの芽は大事にしなければならぬんだ。

宮本は辛い忍耐を覚悟した。

この頃詩人の戸田も、別の靴下のずり落ちた男に脇をつかまれていた。

「何ですか。一体」

「何でもいい、署へ来ればわかる」

「困ります。仕事に行くところや。とにかく荷役を終わってからして下さい」

そういうながらも、戸田は不思議に体から力が抜けていて、ずるずる引き摺られていた。

「何や、何事や」

人が寄り、窓々から首が出、係長があわてて玄関から出て来るのが見えた。

詩人は自分が何だか途方もない変なものの中に、巻き込まれたのを感じた。「扇港エクスプレス」のあの展望台とも、西宮の平和なわが家とも、これでお別れのような気がした。すべてはあの宮本という痩せた男、同人雑誌「リベット」、つまり自分のガントリー・クリーンの詩から出ていると思った。

この時彼の眼はしかし、街路の向うから、例の林という青年が、橙色の工場着姿で近づいて来るのを認める余裕があった。その姿はくるっと後向きになって、すぐ、角を曲ってしまった。戸田はただ、

「ああっ、ああっ」

ということが出来ただけであった。

以来十五日彼は葺合署の独房にいた。何故外国船へ秘密文書を受け取りに行く「赤」の手引をしたか、竹刀、柔道着の帯、その他日本武道の秘術を尽して取り調べられた。彼は初めて世の中にこんな痛いことがあるということを知った。

同人雑誌「リベット」が共産党再建運動の一翼であることを知らずに加入したにすぎないことは、やっと認めてくれたが、もう一人来るはずだった林の名前が阪急神戸事務所にな

かったこと、及びあの日その姿を認めながら、すぐ知らせなかったことで、またひとしきり日本武術の御世話にならねばならなかった。

「お前が赤に関係がないということはわかった。社の方へもそういつといてやるから心配するな」

と釈放される時主任はいったが、戸田はやはり「扇港エキスプレス」は誠になった。

林の人相について、彼が答え得たことは、丈が高いこと、東京弁を話したことだけであった。これだけでは流石有能な特高警察でも、即座に容疑者を選り出すことは困難らしかった。

「リベット」は時代遅れだ、「熔接」でなければならぬと林がいったことを告げれば、或いは若者の身分について、何かの暗示を与えたかも知れなかったが、生れて初めて政治に触れて、すっかりのぼせ上ってしまった戸田は、文学については何もいう必要がないと考えた。これが林に時間を与えた。

林こと井上良吉は急いで宮本と戸田が捕えられた場所を離れながら「またか」と思った。連絡と逮捕はずっと前から、非合法運動にたずさわる者にとって、儀式のようなものであった。打合せの場所に歩いて行くにつれ、必ずどこからかあの靴下のずり落ちた人種の臭いがして来る。「いけないな」と思っても、指令は守らねばならぬ。そして予定の場所に着

き、予定通り「おい」となるわけであった。組織には必ずスパイがいた。

良吉はスパイは戸田だと思った。だから詩人なんて信用するな、っていったんだ。同人雑誌なんかで街頭分子の数を増やしたところで、それだけスパイの数を増やすようなもので、むしろ害がある。永年追ひ廻されてるうちに、あの型の闘士はぼけた。いくら連絡者を補充する必要があるにしても、もっとましな方法が見つかりそうなもんだ。

また俺を船へ連れてって、これから俺に代行させるなんて、呑気なことを考えたもんだ。もし俺がスパイだったらどうする。一体あの文書にそんな危険を冒すだけの値打があるだろうか。デモクラシー国家の共産党の長広舌が、俺達と何の関係がある。

良吉が宮本と結びついたのは、戸田と同じく「リベット」を通してであった。相違は文学は問題でなかったことである。良吉が注意したのは、雑誌が仲間の七つ道具の一つである謄写版で刷られていたこと、宮本の五頁の啄木論の中に、二十度も繰り返されている「嵐をついて」という字であった。これは二年前壊滅した或る地区運動の標語であった。彼はサインを感じた。山手の二階借の編輯所を訪ね、宮本の青白い顔色と猫背に一べんで同志を認めた。

良吉が去年検挙された大学グループのメンバーだったこと、

転向誓約書に署名しても、天皇制は認めないこと、宮本が神戸地区の責任者であることを、互いに知り合うまでには、二週間かかった。

宮本は良吉が二十四の学校を出たての独身者で、兵庫の海岸に工場を持つ日仏合弁の酸素会社の社員で、金廻りがいいのを楽しんだ。酸素はアセチレン瓦斯と併用して、鉄材を溶接切断し、造船の補助産業の一つであった。良吉が「リベット」が時代遅れだといったのは、こういう職場から得たばかりの知識によるものであった。

彼は母を失ったところであった。東京の特高の調室で、「お母さんが心配しておられる。君もこれですっぱり赤ん坊かやめなくちゃいけない」と

という主任の傍で、黙って彼の顔を見続けた白髪の母が、しかしそれほど心配していたとは、彼は思っていない。父の北海道の牧場と麴町の屋敷を取り上げ、ついでにその命まで縮めた銀行家に反抗するのに、母が反対のはずはない。彼女がその一人息子のすることを、みな正しいと信じていたのを彼は知っている。その母が卒中で不意に死んでしまった。

良吉の白い手は、東京の仲間からも、いい眼では迎えられなかった。しかし彼は働いた。天皇制打倒と近づくプロレタリア革命を彼はあんまりあてにしていなかったが、二・二六の時二十歳であった若者は、戦争に反対であった。

三カ月連絡がなかった後、日独伊防共協定の下の日本では、党の活動は完全に止んだと信じて、彼は神戸へ来た。彼は組織から断ち切られた心もとなさを味った。彼が「リベット」に近づいたのは、そういう感情的理由からであった。彼が宮本の仕事の意味を、高く見積らず、計画が失敗したのを、さして悔まなかったのはこのためであった。

朝の港へ急ぐ人々、沖仲仕や倉庫人夫、或いはそういう人達のための、パンや飴を売る婆さんの間を、ぶつかるようにしてすり抜け、高架鉄道をくぐって、彼はやっと自分が安全だと思ふことが出来た。

俺は「リベット」の同人とは戸田のほか誰も会っていない。戸田は俺の林という変名より知らない。でもあの詩人はなかなかいい眼をしていたな。彼奴をスパイだと思わなければならぬのは悲しいことだ。宮本は俺の本名も住所も知っているが、あの人は多分いいまい。

彼は事件に巻き込まれるかどうかということばかり考える自分に気がつき、いまいましくなった。

ちえっ、巻き込まれたってかまわないじゃないか。親も財産もない、まるで小説の主人公みたいに孤独な俺だ。酸素会社に入れてくれた松本の義弟は少しは迷惑するだろうが、気取り屋の重役の迷惑がなんだ。赤い学生の保護者面がしたいばかりに、俺を引き受ける気になったんだから、いわば自業